

# 志賀英雄名譽教授を偲ぶ

秋 山 哲 治

(大学名誉教授)

同志社学園の中で中学から大学まで一貫して育って来た教育学者志賀英雄同志社大学名誉教授は去る二月十日脳こうそくのため天上にかけのぼってしまった。すぐ隣の席を共にした同志社教会にも彼の姿を見ることが出来なくなってしまう。淋しき限りである。今は只、故教授との長い交遊を偲ぶほかない。

彼は明治四二年生れ、私とは大正一〇年(一九二一)四月相携えて同志社中学の門をくぐった。そして、同志社北寮第五寮で寢食を共にすることになった。第五寮長としてわれわれの面倒をみてくれたのは当時大学経済学部(現経済学)の学生青田五良氏であった。放課後夕食までは寮生には自由時間であり、志賀少年は運動場で砲丸抛に興じたり、または、マンドリンを奏して楽しんでいた。夕食がすむと、毎夕礼拝が寮長の司会で行われ、そして寮長の感話に耳を傾けた。青田寮長は「白樺」の武者小路実篤の思想に心酔し礼拝席上の感話はこの武者小路一辺倒であったと言ってもよい。感動的な話しぶりはわれわれ寮生に多大の感銘を与えたのであり、志賀少年も魂の奥深く印象を受けその生涯を通じて導師の一人であったと思われる。青田氏はゴッホばりの

油絵を描いていたが、人生に処する態度として純粹性と真実に立ち決して安易な処世を求めぬな、と力説した。志賀兄の父君はお医者であり、その後継者になるよう彼に求められたが、彼は受験だけは父の説得に応じたが白紙の答案を出してきたという逸話を聞かされた。彼はこの当時から自己の進むべき路を自覚的に決めていたのである。大学予科を終わる頃、大塚節治先生から神学科への進学を奨められたが哲学科を選んだということである。自己を知るものと言うべきであろう。

昭和七年三月哲学科を卒業し五月には助手に採用され、ひたすらに学究としての峻険な途をたどることになる。そして、昭和四四年三月の定年退職に至るまで四七年間教師として学園同志社の一翼を荷なうのであるが、彼の途は決して坦道ではなかった。彼が大学文学部教授として漸く安定した地位を占めたのは昭和二四年四月以後である。昭和三七年から四年間彼は同志社商業高等学校の校長を兼務したことから、同志社女子大学の非常勤講師を長く続けたことも教育学者としての幅を広くし実践を深めたことであろう。

長年の研究と教養の根源となっていた欧州



文物を实地に見聞するため四〇年七月から九月まで在外研究員としてヨーロッパ諸国を巡歴したが、不満が残る彼は私費を投じて翌年再び魂のふるさとを訪ねたのであった。

志賀教授の古稀を記念して昭和五四年三月発刊された同志社大学文化学会の文化学年報第二八輯には、「私の精神的総決算」と題する論策が載せられている。彼の思想学問形成の道程とその成果を語る文字通り総決算をなすものである。右手に『新約聖書』口には讃美歌」と題するプロローグがある。彼には讃美歌こそイエスの真理の殿堂に入るための「美しい門」であったと言う。イエスのみ言葉の美しさがその真理の高さ・深さ・大きさによって本質づけられていると理解する。信仰と美との一致を彼なりに説くものである。彼はこれに続いて「左手にもつゲーテの『ファウスト』と題して論ずるのであるが、右手に聖書左手にはファウストという言葉は彼の口から再三ほとばしった彼の殺し文句である。ファウストは新約聖書と並んで宗教的人間観と世界観を啓示するというのが彼の解釈である。第三節は「眼にはギリシア美術」第四節は「耳にはベートーフェンの音

楽」を論じている。そして、最後に「ベートーフェン」は今や音楽の帝王から「音楽のメシア」の位置にまで高昇し、深い感動と感謝の源泉として、私の心の奥底に定着し、もはやこれは変わることはない、と言いつつ切っている。

信仰と美、これを中心として彼の教育学は構成されたのであろうか。その実践として、よく学生を自宅に招いたのであるし、教会においては執事として奉仕、この間、同志社教会八十年史及び九十年史の編纂の努力を惜しまなかった。また、同志社新島研究会の役員として、講演に、また研究誌の編集に努めたことも忘れられない。ファウストの最終の句に「永遠に女性なるもの我等を引きて往かしむ」の言葉がある。故志賀教授の愛唱讃美歌五二七番の3節に「シオンの娘かたれかし」の句が見られる。清純可憐で美しい少女は天上への導きの星とも見えたのであろうか。

# 中村貢先生を偲ぶ

小田 幸信

(女子大学教授)

昨年七月二十六日に中村貢先生が天に召されてからはや一年が経ちました。先生は昭和十二年九月から四十一年十二月まで同志社女子専門学校、女子大学の教授として、また、引き続き四十七年三月まで嘱託講師として、英語、英文学、音声学、英語科教科教育法をご担当のかたわら、教員によるシエクスピア劇上演の指導者として、また、学生課長、同志社理事として多方面にわたって同志社のために尽されました。

筆者は、女子大学就任の翌年の三十五年から音声学、三十六年から教科教育法の科目担当を先生から引き継ぐという光榮に浴し、専任、講師の期間を通して十四年間、先生からいろいろご指導を受けました。個人的な思い出に、七月六日午後一時半から四時まで、女子大学デントン館地下会議室で、催した「ありし日の先生を偲ぶ会（先生から温かいご指導を賜わったり、親しくしていただいた有志約五十名が相寄り、ご遺族をお迎えして）」で聞きしことを加えてみたいと思います。

先生の声は本当に美しく、こよなく愛された英語の詩の朗読、「Your voice must be deep and strong」と言つたスピーチの模範

を示された先生のお声が今でも耳に残っています。先生は歌がお好きで、教員有志による「イーストミンスター」コーラスグループの指揮をされていたのを昨日のように覚えております。そして、(筆者就任時にはその催しはやんでいた)教員によるシエクスピア劇において、先生の口を通して栄光館の後の席まで通るハムレットのセリフが聞えてくるような気がします。

シエクスピアと言えば、三十八年の前期に高田峯尾先生(外遊のため)に代わって四年生必修のテキスト「ハムレット」を読み、後期(十一月)には学生による「ハムレット」上演で高田先生のお手伝いをしました。そのときのプログラムのとびらにある「元来学生の劇は見るためよりむしろ演ずるためにある」と言われる。キャストもスタッフもそれぞれの分野で熱心に研究し、その成果をこの一夜の上演に賭けるのである。やり直しは出来ないのだ。このことをよく御理解をいただいで劇中の口上役の言い草をまねて『お慈悲深い諸賢の前にかく膝をかがめて、辛抱強く最後まで御高覧の程を』お願い申し上げる」という先生の言葉から、先生の教育に対する真



剣な態度、情熱が伝わってくるのを感じます。

女子大学の L・I (Language Laboratory) は三十九年に設置されて以来、生きた英語の教育に大きな貢献をし、テープおよびビデオライブラリーは誇れる位に充実してきております。これは、いわゆる「タコの足」と呼ばれる簡易ラボから始め、その当時最高級の L・I 設備実現に尽力された中村先生の先見の明によるところが大であることを忘れてはなりません。

もう一つ忘れてならないのは、途中、ヘルペスによる苦しみを克服されながら五十年十月に完成された伝記「デントン先生」です。

そのあとがきに、先生は「昭和十九年秋、当時の女専、高等女学校校長片桐哲先生のご配慮によって空襲時にデントン先生を護衛する任務を与えられ、デントンハウスの一室に寄偶することを許されました」と書いておられます。このことによっても、片桐先生及びデントン先生が如何に中村先生を信頼されていたかがうかがわれます。

四年生の教育実習を受ける希望者が多くなく、実習校の調整が困難になり始めた頃、教職課程委員会で、人数制限が話題になり、他

のいくつかの大学が実施しているように、二年までの英語専門科目平均八〇点以下は制限したらどうかということが提案されました。しかし、中村先生は「英語の成績が良くなくとも、教授技術、指導力があり人間的にすぐれておれば立派な教師になれます」と終始主張し、常に人間教育の重要さを強調されました。

先生は、滋賀県の八幡商業学校在学中の前半は禪宗のお寺に下宿され、後半は Y M C A の学生と一緒にメリル・ヴォーリス先生（近江兄弟社創立者で同志社カレッジソング歌詞の作者）のお宅に下宿されました。ヴォーリス先生のまかれた一粒の麦が、同志社大学文学科進学、キリスト教への信仰、同志社女専・女子大学での教育となって中村先生において結実したのではないのでしょうか。そして、中村先生のまかれた一粒の麦が日本の各地で実っていることを思い感謝の気持で一杯です。